世界史　人間の行く末を知るのに不可欠

「先生は西洋史が専門なんですか。きっと記憶力がいいんですね」大学院生時代、アルバイト先の塾で教え子の母親に言われた言葉である。受験生の多くもそう考えているかもしれない。世界史の教科書には、人類の誕生から現在までの長い期間、世界中のあらゆる地域で起こった事象が記されている。その一つ一つの出来事を子細に眺めてみるのは面白く、またある時代を俯瞰して歴史の大きな流れを追っていくのは刺激的で知的興奮を呼び起こす作業でもある。しかし、限られた時間内に多くのことを頭に詰め込まなければならない受験勉強では、そのような余裕はなく、ひたすら教科書に書かれていることを記憶するというのが現実だろう。

しかし、歴史学者は、過去に関する情報を記憶することを仕事にしているわけではない。意外に思う人がいるかもしれないが、過去は未知の世界なのである。教科書や書物に書かれていることは、過去に関する断片的な情報を、人々が整理して推測したものにすぎない。歴史学者は、未知の世界に対する強い探求心のもと、過去の痕跡を調べ、過去の本当の姿を知ろうとしているのである。そして、過去を知ることによって、現在の自分たちを理解しようとしているのである。

グローバル化が急速に進む中、今、日本社会は既存の閉じた社会から流動性の高い社会へと劇的に変容しつつある。その混乱に戸惑い、将来への不安を抱いている人も多いはずだ。不安の最大の要因は、自分がどういう状況にいて、その状況が今後どうなるかが分からないからである。それを、教えてくれるのが歴史学なのである。今生きている社会や世界がどのような状態にあり、それが、今後、どのように変化していくかを見通すためには、自分たちの社会や世界を長い歴史の中に置いて、その変化を見なければならない。現在の状況は、現在だけを見ていても分からないのである。自分自身の人生を振り返れば分かるように、過去の記憶がなければ、私たちは自分が現在どのような位置にいるか分からず、

将来もまったく予測できないだろう。世界史は、人類や人間社会が今どのような位置にいて、これからどのように変化していくかを理解するために不可欠の学問なのである。

歴史を含む人文学は、人間や人間社会がどのようなものかを学ぶ学問であり、私たち一人一人が生きていくために必要な道具、最も基本的で重要な知識を与えてくれる学問である。今、高校で世界史を学ぶということは、生涯自分を守ってくれる重要な武器と技術を身に付けているのだということを忘れないでほしい。

＊＊＊

たかやま　ひろし
高山　博　教授　　（人文社会系研究科）

90年エール大学大学院歴史学博士課程修了、Ph.D.取得。04年より現職。西洋史学研究室に所属し、専門は西洋中世史。

『東京大学新聞』2008 年 9 月 16 日発行 4 面